

古墳時代後期の外来系土器

—東信地方における南伊勢系を中心として—

藤原 直人

I はじめに	V 佐久盆地出土の外来系土器
II 芝宮遺跡群・中原遺跡群の概要	VI 長野県内の外来系土器
III 中原遺跡群出土の外来系土器	VII まとめ
IV 南伊勢地方北野系土器と東海系土器の展開	

I はじめに

佐久市・小諸市に所在する芝宮遺跡群・中原遺跡群は上信越自動車道建設に伴い調査を行った(芝宮遺跡群は1992～1994年、中原遺跡群は1992～1993年)。

本年度は整理作業2年目にあたり、遺物の実測もまだ終了していない段階で、遺物の全貌をまだつかんでいないが、遺物を観察する中で在地の土器・周知の搬入土器以外に未周知の外来系土器が看取されたため、それらの土器に関して中間報告したい。

II 芝宮遺跡群・中原遺跡群の概要

佐久盆地の北部、佐久市と小諸市の市境に位置する芝宮遺跡群・中原遺跡群は、浅間山の南斜面に広がる「田切り地形」の台地上にある。周囲の台地上には古墳時代後期から平安時代にわたる鋳師屋遺跡群・周防畑遺跡群・長土呂遺跡群等の大規模な遺跡群が展開し、現在整理作業をしている芝宮遺跡群・中原遺跡群もそれらの一角を形成している。これら遺跡群の存在は早くから知られるものであり、古代の牧・古東山道・令制東山道を考える上でも注目されてきた遺跡群である。

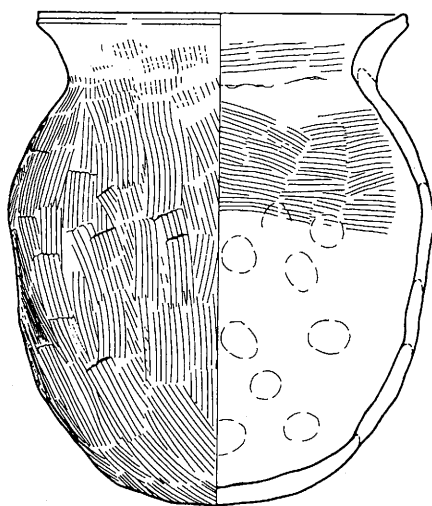
検出された遺構は、古墳時代後期～平安時代の遺構で、芝宮遺跡群が竪穴住居跡245軒・掘立柱建物跡約90棟、中原遺跡群では竪穴住居跡140軒・掘立柱建物跡約90棟を数える。遺物に関してはテンバコにして1000箱を超える数が出土している。

III 中原遺跡群出土の外来系土器

(第1図)を出土した中原遺跡群302号住居跡は調査区の北端に位置し、遺構の規模は南北5.05m・東西5.10mを測る方形を呈し、今回の調査遺構の中ではやや小ぶりの住居跡である。7世紀後半の甑と共に出土している。第1図の土器器甕は小型で器高は19.2cm・口縁部径14.6cm・胴部の最大径は16.8cmを測るものである。底部は丸底、内面と外面には刷毛目調整が施され内面下半はヘラナデで、口縁端部をつまみあげている。

この特徴を有する土師器甕は近畿地方に多く見られ、関西方面にその起源を求められてきた。このタイプの土器は中原遺跡群、芝宮遺跡群の両遺跡からも数十点出土しているが、全て破片で口縁部から底部まで復元し得たのはこの遺物だけであった。この土器は破片になってしまうと口縁部・胴部の張り、器面の調整といった土器の特徴がわからなくなり、畿内周辺でも他の土師器の甕の特徴とかなり共通するため、甕の地域を特定できなくなる。そのため今までは、近畿・関西といった広域な地域を想定するしかなかった。

昨年、資料の増加や「古代の土器研究会」などで関西各地の土師器甕を観察するにあたり、三重県伊勢地方の土器の特徴とかなり近似するのではないかとの印象を受



第1図 中原 302号住居跡出土土器

けたため、三重県埋蔵文化財センターの大川勝宏・斎宮歴史博物館の上村安生氏らに実見していただいたところ、三重県南伊勢地方の7世紀後半から8世紀初頭のいわゆる「北野型に間違いなし」との所見(上村氏の分類によると甕A1類)が得られた。

IV 南伊勢地方北野系土器と東海系土器の展開

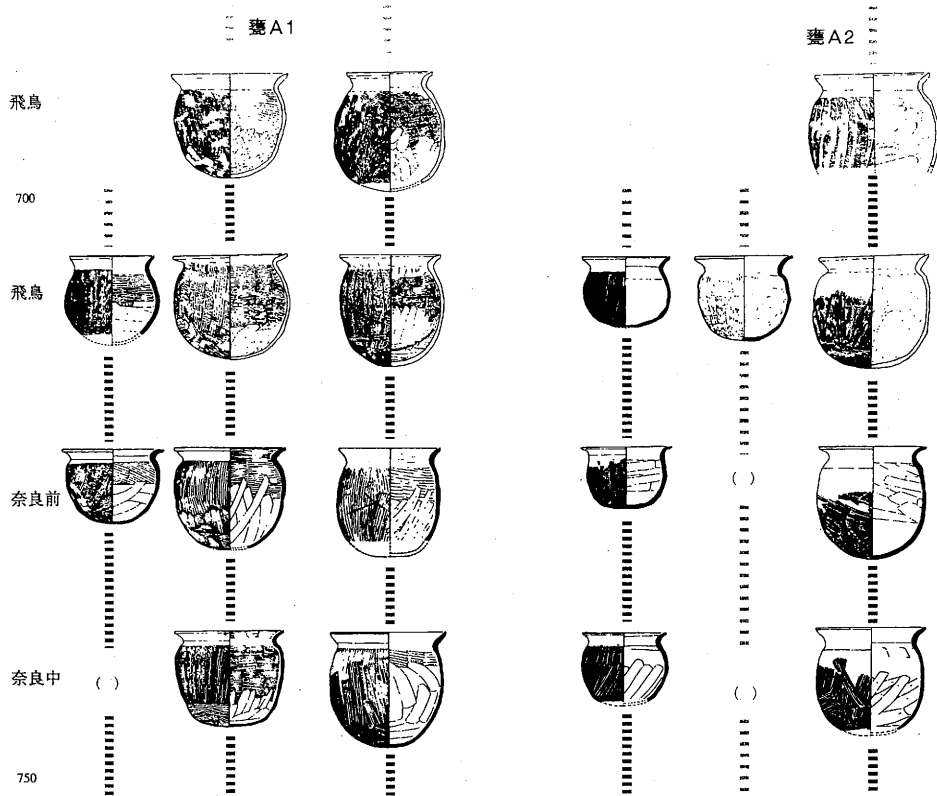
「この地域が須恵器・灰釉陶器の卓越した生産国であり、…土師器煮沸具についてはほとんど目が向けられることはなかった。…最近の資料の蓄積により、古代の土師器については暗黒であったこの地域についても、ようやく他の地域と比較できるようになってきた。(註1)」といわれるように東海地方での煮沸具である土師器の甕に関する研究は、胎動し始めたばかりといわざるを得ない。そういった中で出土遺物の産地を推定するのはかなり困難なこととおもえるので、今回はあえて特定を行わない。

上村氏は当該地域の古代土師器煮沸具の分類を行っている。その分類の中で、煮沸具を甕・鍋・甑に分け、甕に関してはA～Hの7つに分類し、今回関係するA類に関してはA1～A6類に細分を行っている。

甕A1類：口縁端部をつまみあげ、体部外面をハケメで調整し、内面は上半をハケメで調整し、下半をヘラケズリで調整するという特徴的なものである。

甕A2類：内面にハケメ調整がみられず、ヘラケズリあるいはナデによって調整されたものである。また、口縁部のつまみあげも顕著ではないものの方が多い傾向にある。

甕A3類・甕A4類に関しては外面ヘラケズリ調整で、甕A1類・甕A2類にそれぞれ対応させ



第2図 斎宮跡甕A変遷図（上村1996より転載：一部改変）

ている。

以上を甕Aの基本構成とし、これらの土器群の他、甕A3類・甕A4類については時期的に8世紀後半ということであり、佐久地方で出土する例のほとんどが古墳時代後期(7世紀代)であることから、時期的にずれるため今回は取り上げない。また長野県下各地での要素や出土量にばらつきがあり、広く東海地方の様相を考えるまでにはいたっていないので、今回は上村氏の編年観を参考するに留めたい。

A1類とA2類については、おおよそ飛鳥時代から奈良時代後期まで(7世紀後半から8世紀後半)一定量見られるとのことである。特にA1類の甕が三重県下各地で出土し、斎宮や伊勢神宮に限ることなくかなり広い範囲の流通、さらにはそれが東海地方(濃尾平野)にまでおよんでいることを示唆している。

また斎宮周辺域の特に北野遺跡などの土師器焼成坑の多さには目を見張るものがあるが、それら多数の焼成坑から「当地(有爾郷)は古代より伊勢神宮に献納する土器を焼成していた地として知られ、養村には神宮土器調整所があり、土器作りが今も行われていることから、当地周

辺が古代の土師器の一大生産地であったことは明らかである。(註2)」とかつての生産地の可能性が指摘されている。

V 佐久盆地出土の外来系土器

佐久盆地内に存在する遺跡の調査で、古墳時代後期(7世紀代)の住居跡からしばしば刷毛目を多用する土器群が出土することが知られてた。

佐久地方で出土する土器の中には在地のものではない土師器群がある。武蔵型甕・北陸のロクロ甕・有段口縁坏等がそれで、これらの内ほとんどのものは、客体的というよりはある時期には主体を占めるものもあり、外来というよりは他地域の影響の下に(生産されたのか、搬入されたのかは別にして)本地域で日常的に使われたと考えられる集団である。これに対し、畿内系暗文坏・甲斐型坏・丸底の刷毛目小型甕等はいくまでも客体的な存在の域を出ず、出土例も僅かである。今回はそれらの中の刷毛目調整された小型の丸底甕を取り上げたい。

従来、遺跡から出土した土器に対して「在地のものではない」「客体的な」と判断された場合、「外来系」、あるいは「搬入品」と呼ばれてきた。

佐久市前田遺跡の報告(註3)では「搬入品」「他地域からの搬入あるいは模倣品」と定義している。花岡氏(註4)は纏向の定義を引用し「搬入品」と呼んだ。また、今回紹介する土器とは性質を異にするが、畿内系暗文と呼ばれるグループがあることは従来より知られているが、その暗文を有する土器群の把握について西山氏(註5)は「畿内系暗文土器」という用語を使用している。

このような出土例の少ない土器を持って何を語るのかは次回として、今回はあくまでもイレギュラーな土器の紹介に留めたい。

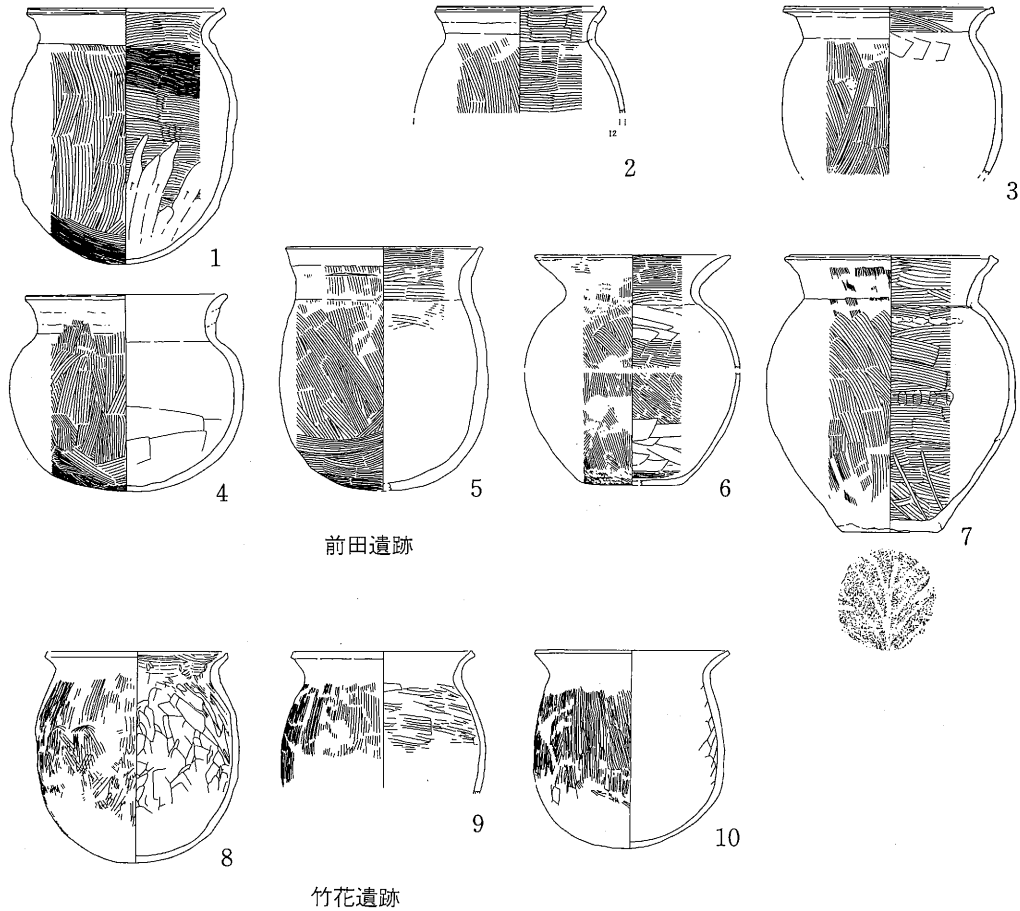
「前田遺跡」

佐久市前田遺跡では、異系統土師器の刷毛目調整された小型甕をD類とし、さらに5つに細分している(第3図1～7)。その中で丸底のものをD1～3類とし関西地方という位置づけを行っている。D1類(第3図1～3)は東海地方の可能性が高いと思われる。特に第3図1は上村編年の甕Aの範疇で考えたい。第3図2については底部が欠けるが口縁部つまみあげを観察できる。第3図3は口縁部の形態・刷毛調整の施し方が他に比べてやや異質である。D2類(第3図4)は外面に刷毛の多用が認められるが内面の調整や全体のプロポーシオンが異質である。D3類(第3図5)の形態は胴部最大径をD1類より下位に持ち膨らみも少ない。また、D4・5類(第3図6・7)は平底のもので、D5類に東海地方「駿東型」を当てはめている。いずれの土器も形態・手法・胎土が異なり、他地域からの搬入あるいは模倣と捉らえている。

それらの出土した遺構の年代はいずれも前田編年のI期(古墳時代後期)である。

「竹花遺跡」

小諸市竹花遺跡では、小型の甕の中に刷毛目調整され口端部をつまみあげた形状で丸底のものをC類(第3図8～10)として畿内系に位置づけている。第3図8・9は東海地方産であろうが内外面に刷毛目が看取される。8では口端部のつまみあげがわかるが内面の刷毛調整が口縁



第3図 佐久地方出土の外来系土器

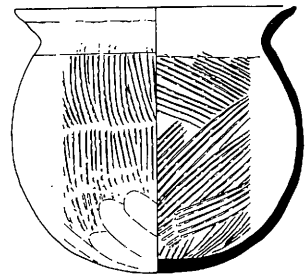
部に留まっていることから、上村編年のA2類に該当するものであろうか。10は胴部最大径をやや下半に有し、内面に刷毛目が見られないことから近畿の河内・和泉地方に比定されようか。

3点の出土した遺構の時期は、竹花編年のVI期とVII期(7世紀代)である。

VI 長野県内の外来系土器

「松本市高畑遺跡」

第3号住居跡から出土している甕(第4図)について、「球形の胴部と丸底をもち胎土が黄灰色を呈す非常に珍しい土器で他地域からの搬入品である。器形や調整からみて近江型の甕に含まれると考えられるが、細部に若干の違いがある。」と報告してる。該当住居跡の時期は出土遺物と



第4図 高畑 3号住居跡出土土器

遺構の新旧関係から7世紀末～8世紀初頭を与えている。報告では器形や調整から近江型としている。

この他の出土例をあまり聞かないが、平安時代(9世紀後半)になると少数であるが刷毛目調整された平底の甕が散見される。古墳時代後期にあっては、信州の中で佐久地方の出土数は他の地域を卓越している。

VII まとめ

花岡氏の指摘のように住居址から出土する「外来系土器には、供膳具と煮沸具の二者が認められる…」そして供膳具の黒彩土器・有段口縁坏や丸底の刷毛目甕・把手付鉢の出土の仕方に片寄りが見られる点に注意を置いている。また、「それは集落の持つ性格を表わすものといえる。いずれにせよ畿内系暗文坏を含め、総体的に考えていかなければならないと考えている。」絶対量が少なく、さまざまな分野からの支援のない中で憶測の域を出ないところが多いが、極力具体的な検証を試みその実態に迫りたい。

今回紹介した中原遺跡群の例もそうだが、カマド周辺で出土し土器の器面には使用による煮焦げの痕跡が認められた。これは中原の例だけでなく、前田遺跡でも観察される。第3図中の1～5・7はカマド内、あるいはカマド周辺の床面上から出土しているのが報告されている。さらに1・4・6・7では煤の付着が観察されている。煮沸具の甕であるので本来の姿であるのだが、はるばる運ばれて来たとするなら、それを日常雑器として使っていることに若干の疑問が残る。

出土例の少ない中で様々な推測をすることは可能だが、それでは憶測に過ぎない。しかし例が少ないからと足留をしているのもまた事態解明の遅延の原因となりかねない。少ない出土例の中からどれだけの情報を引き出せるか、今後報告書作成の中で試行錯誤を繰り返したい。

今回この小文をまとめるにあたり、下記の方々からは多大なるご教授・ご配慮をいただきました。謹んで感謝申し上げます。(敬称略)

宇河雅之 大川勝宏 上村安生 花岡弘 林幸彦 原明芳 西山克己

註1 城ヶ谷和広 1996「東海地方の古代煮沸具の様相と諸問題」『鍋と甕のデザイン(第4回東海考古学フォーラム)』

註2 以前から文献史学の側から指摘をされていた。

註3 佐久市教育委員会 1989 『前田遺跡(第I・II・III)』

註4 花岡氏は「外来系土器の定義は、関川尚功氏に従い、『よその地域で製作されて搬入された土器とそれをモデルとして在地で製作された土器、すなわち搬入品と模倣品』とする。」と関川氏の纏向での定義を援用し、小諸市教育委員会 1994 『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』の報告では他地域の土器として「畿内系甕」の用語を使用している。

註5 西山氏は暗文土器からその社会的な背景を探ろうとし「土器の器形・調整や、暗文の施し方・技術、そして胎土分析等の問題から確実にどの種の暗文土器であるかを把握し、認識することが大切であろうと考える

ことが出来よう。それはたとえば、暗文土器を作る特別な人々、あるいは集団(工人・工人集団)が存在し、ある特定の地で作られたものなのか。あるいは、各地域において、作りえられる状況であったのか、そしてその作られた土器は政治的、経済的、あるいは精神面、生活面等のいずれが背景となってそれぞれの寺院・官衙・集落・墳墓に持ち込まれたものなのか。と言う事などである。」と暗文土器から当時の社会背景に迫ろうと試みている。私が今回取り上げた東海・近畿地方の煮沸具は、暗文土器とは性格を異にするものであり、同レベルでは語れないものであるが、西山氏の注意する観点は多に参考にしたい。

参考文献

- 小笠原好彦 1980 「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』27-2
- 西 弘海 1971 「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』
- 西山克己 1984・1985 「東国出土の暗文を有する土器」『史館』17・18
- 花岡 弘 1991 「6中部高地」『古墳時代の研究 第6巻 土師器と須恵器』雄山閣
- 上村安生 1996 「伊勢・伊賀における古代土師器煮沸具の様相」『鍋と甕のデザイン (第4回東海考古学フォーラム)』
- 城ヶ谷和広 1996 「東海地方の古代煮沸具の様相と諸問題」『鍋と甕のデザイン (第4回東海考古学フォーラム)』
- 三重県埋蔵文化財センター 1991 『平成2年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財調査報告』第2分冊 94-2
- 佐久市教育委員会 1989 『前田遺跡(第I・II・III)』
- 小諸市教育委員会 1994 『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』
- 勸長野県埋蔵文化財センター 1992~94 「芝宮遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター 年報9・10・11』
- 勸長野県埋蔵文化財センター 1992~93 「中原遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター 年報9・10』
- 松本市教育委員会 1987 『松本市高畑遺跡』